

ア

アー (～言う, ～した) →61

アー (～は行かない, ～だこうだ)

→76, 86a 《感》(～驚いた) →66

アーカイブ, アーカイブ archive →9

アークトー arc 灯 →14

アーケード, アーケード arcade →9

アース earth →9

アーチ arch →9

アーチェリー archery →9

アーティスト, アーティスト artist

(ティはチとも) →9

アート art →9

アートシ art 紙 →14

アートフラワー art flower〔和〕 →16

アーム, アーム arm →9

アーメン, アーメン amen〔参〕 →9

アーモンド, アーモンド almond →9

アイ 藍 →1 間, 合 →2 愛 →6

アイアイ, アイアイ 藹藹(和気～)

→58

アイアイガサ 相合傘 →12

アイアン, 《新は アイアン》 iron〔ゴルフ〕 →9

アイイク 愛育 →8

アイ(・)イレナイ 相容れない →91, 97, 98

アイイロ 藍色 →4

アイイン 合印, 愛飲 →8

アイウエオ →17

アイウエオジュン あいうえお順 →14

アイウチ 相打ち, 相討ち →5

アイ(・)ウツ 相搏つ →91, 97, 98

アイエイチ, アイエッチ IH<

Induction Heating →16

アイエムエフ IMF<International

Monetary Fund →16

アイエルオー ILO<International Labor Organization →16

アイエンカ 愛煙家 →14

アイエンキエン 合縁奇縁 →99

アイオイ 相生 →5

アイカギ, 《古は アイカギ, もと アイカギ》 合鍵 →5b

アイカタ, 《古は アイカタ, アイカタ》 合方, 相方 →5

アイガモ 合鴨 →5

アイカワラズ 相変らず →67

アイカン 哀感, 哀歎 →8

アイガン 哀願, 愛玩 →8

アイキ 愛機, 愛器 →7

アイギ, アイギ 合着 →5

アイキドー 合気道 →14

アイキヤク 相客 →8

アイキュー IQ<intelligence quotient →16

アイキョー 愛敬 →8

アイキョーゲン 間狂言 →15

アイキョーシン 愛郷心 →14a

アイキョーモノ, アイキョーモノ, アイキョーモノ 愛敬者 →12

アイクチ, アイクチ, 《古は アイクチ, アイクチ》 合口〔刀〕 →5b

アイクルシイ★ 愛くるしい →54

アイケン 愛犬 →8

アイコ, アイコ 相子(オアイコ 御～) →5, 92

アイコ 愛顧 →7 愛子〔女名〕 →25

アイゴ 愛護 →7

アイコー 愛好 →8

アイコーシャ 愛好者 →14a

アイコーシン 愛校心 →14a

アイコク 愛国 →8

アイコクシャ, アイコクシャ 愛国者 →14c

アイコクシン, アイコクシン 愛国心

アカノゴハン 赤の御飯 →19
アカノ(・)タニン 赤の他人 →97, 98
アカノマンマ 赤の飯『植』 →19
アカハジ, アカッパジ 赤(っ)恥(～を
 かく) →5d
アカハタ 赤旗 →5
アカハダ 赤肌 →5
アカハダカ 赤裸 →12
アカハナ, アカバナ, アカッパナ 赤
 (っ)鼻 →5d
アカパネ 赤羽『地』 →21
アカハラ 赤腹『鳥・魚』 →5
アカビカリ 垢光り →13
アカヒゲ 赤髭 →5
アカブサ 赤房 →5
アカフダ 赤札 →5
アカペラ a cappella[伊] →9
アカボー 赤帽 →8
アカホン 赤本 →8
アカマイシ 赤間石 →12
アカマツ, アカマツ, (姓は アカマツ)
 赤松 →5, 22
アカミ 赤身 →5 赤味 →93
アカミソ 赤味噌 →15
アカムケ 赤剥け →5
アカメ 赤目 →5
アカメル, アカメル 赤める →44
アガメル 崇める →43
アカモン 赤門 →8
アカラガオ, アカラガオ 赤ら顔 →12
アカラサマ, アカラサマ →12
アカラム, アカラム 赤らむ →44
アカラメル, アカラメル 赤らめる
 →44
アカリ 明り, 灯 →2
アガリ 上がり, 揚がり →2
……アガリ …上がり(ヤクニンアガ
 リ 役人~, ショーバイアガリ 商売
 ~) →95

アガリオリ 上がり下り →18
アガリガマチ 上がり框 →12
アガリグチ, アガリグチ(グはクとも)
 上がり口 →12
アガリコム 上がり込む →45
**アガリサガリ, アガリサガリ, アガリ
 サガリ** 上がり下がり →18
アカリサキ 明り先 →12
アカリショージ 明り障子 →15
アガリダカ, アガリダカ 上がり高
 →12
アガリダン 上がり段 →14
アカリトリ 明り取り →13
アガリバ 上がり場 →12
アガリハナ 上がり端(=上がり口) →12
アガリバナ 上がり花(=お茶) →12
アカリマド 明り窓 →12
アガリメ 上がり目(株が~だ) →95
アガリメ, アガリメ 上がり目『目』
 →12
アガリモノ 上がり物 →12
アガリユ, アガリユ 上がり湯 →12
アガル 上がる, 揚がる **アガラナイ,**
アガロー, アガリマス, アガッテ,
アガレバ, アガレ →44
アカルイ 明るい **アカルカッタ, ア
 カルク, アカルクテ, アカルケレバ,**
アカルシ →53c
アカルミ 明るみ →93
アカレンガ 赤練(煉)瓦 →15
アカワイン 赤 wine →16
アカン 阿寒『地・湖』 →21
アカンコ 阿寒湖 →14a
アカンタイ, アカンタイ 亜寒帯 →15
**アカンベ, アカンベ, アカンペー, ア
 カンペー, アッカンペー** →d
アカンボー, アカンボ 赤ん坊 →94d
アキ 明き, 空き →2
アキ 秋 →1 安芸(～の国) →21

序

二十一世紀の始まる年に『新明解日本語アクセント辞典』を世に出した。それは、いわば二十世紀末までのアクセントを記録したものだった。その後、十余年の間に、インターネットの普及をはじめ日本語を取り巻く環境は大きく変わった。その中で日々新たな言葉が生まれ、アクセントにも新しい傾向がみられるようになった。

今回の第2版に向けての改訂作業も、この間の日本語の変化に単純に従うのではなく、これまで序文や解説で記してきた記述の方針によって進めた。新収録の言葉を選ぶに際しては、これまで収録することができなかったものや、新たに幅広い世代で日常的に使われるようになった言葉を中心に選ぶようにした。また、東京近郊の地名などの固有名詞や、読者の方々からお問い合わせの多かった言葉も加えた。そして、新しい傾向として一定の定着をみたと考えられるアクセントについては、それを追記した。あわせて《新は》《古は》《強は》といったアクセントの移り変わりについての注記も、時代を考慮し一部を改めた。その結果、収録語数は約1,600語増え、約76,600語となった。

さらに、この間のアクセント研究の進展や、読者の方々からのご質問を踏まえ、「解説」と「アクセント習得法則」も見直した。基本的な考え方は変えていないが、理解の助けとなるよう説明の仕方を一部改め、資料も増やした。

こうして、日本語の変化を取り込みつつ新たな版となったこの辞典だが、この間の最大の変化は、五十年にわたって辞典作りを導き、この序文を書き続けてくださっていた金田一春彦先生を2004（平成16）年に失ったことである。今回も、収録語の収集・アクセント調査は秋永が中心に行ったが、金田一先生が支えてくださった考え方は変えずに作業を進めたことから、引き続き監修者としてお名前を挙げさせていただくこととした。

この辞典が、これまで以上に読者の方々に広くご活用いただき、その中でお気づきになったことをお寄せいただけるならば、この上ない喜びである。

2014（平成26）年1月15日

秋 永 一 枝

『新明解日本語アクセント辞典』初版の序

私は、昭和三十三年に『明解日本語アクセント辞典』の序文を書いたが、今その本の三訂版にあたる序を書きながら、アクセントに対する考え方が、昔と今とで随分違っているのに気づいて驚く。

初版の序文を書いた頃は、見返しの地図に記したアクセントの区別のない地域の小学校の子供に、「箸」と「橋」、「雨」と「鮎」の区別を尋ねても、全く答えてはくれなかった。その後注意してみると、アクセントの区別のない地域にも東京アクセントをかなり自由に使いこなせる人がおり、現在ではそういう若い人たちが次第に多くなりつつあることを知った。これは、テレビ・ラジオの普及によるところが大きいに違いない。とすると、そのような地域の人にとっても標準アクセントの辞典は必要であることがわかった。それならば、標準アクセントの法則などは大いに有効であろうと思い、今度の版では編者の秋永君に標準アクセントの法則の欄を、より詳しいものにしてもらった。勿論、アクセントの区別のある方たちが、標準アクセントをマスターする際にも、大いに役立つものと思う。

今回、再訂版よりも更に収録語数を増やし、本文のみで約7万5000語とした。この中には新語や固有名詞もかなり含まれている。また、若い人たちの使うアクセントも大幅に取り入れてあり、私どもの年代では全く使わないような外来語の平板型も、『新』として記載してある。同時に、高年層の使用する古めかしいアクセントも、『古』《もとは》として記してあり、その点一般の読者ばかりでなく研究者にも利用されるに違いない。

この辞典の語彙の収集・アクセントの調査は、初版、第二版と同じく、秋永一枝君が全面的にその任にあたった。永年、早稲田大学文学部の教授を勤めた秋永個人の著書とお考えいただきたい。

今回は、『新明解日本語アクセント辞典』と書名を改めたが、私どもの基本とする考え方は、初版、第二版の序に記したとおりである。新しい世紀に向けてこのようなアクセント辞典を世に送ることができるのは真に喜ばしい。読者の方がたが、それぞれの年代に応じて本書を利用してくださることを望んでやまない。

終りにあたり、本書の成るについて協力を惜しまれなかった多くの方がたに感謝の意を表する。

平成十三年一月十五日

金田一春彦

『明解日本語アクセント辞典』第二版の序

この辞典も、初版を世に送ってから二十二年余になる。暖かく迎えて下さった御愛用の各位には慎んで御礼申し上げる。二十二年も経るうちには、日常使っている日本語の語彙も出入りし、中にはアクセントそのものが変化したものもある。ここに採録語数をふやし、第二版をお届けする次第である。

日本語のアクセント辞典としては、これとは別にNHKの『日本語発音アクセント辞典』というものがある。一つあればいいではないか、それに辞典によって単語のアクセントがちがうものがある、それはどうしたのだ、という声が聞える。が、そういうものではない。アクセント採録の目的にちょっとしたちがいがいるのだ。

NHKの辞典は、一口に言うところ全国共通語の発音とアクセントの辞典だ。ということは、必ずしも東京という土地の発音とアクセントを取めたということではない。語形や発音の方で、オッコチルとかシャジ（匙）というのは、東京人の使う言葉であり、東京なまりであるが、そのようなものはNHKのアクセント辞典には採用していない。それに応じて、アクセントの面で東京なまりと判断されるようなものは、省いてある。

一方、この私どもの『明解日本語アクセント辞典』は、純粹の東京の発音、東京のアクセントと見られるものに焦点をあて、俗語や東京なまりの類までとりあげた。そのために資料としたのは、すべて純東京人と見られる人であり、中には、現在では老人層でないほとんど使われていない形もあげてある。これも特別の用途があるだろうとの考えによるもので、意図するところを諒承されたい。

なお、この辞典の初版は、秋永一枝君が原稿を書き、私が通覧して意見を述べたものだった。が、今回は秋永君の書いたものをほとんどそのまま活字にした。秋永個人の著書と考えて頂いてよい。一言お断りしておく。

終りに際し、この本の成るについて、協力を惜しまれなかった各位に感謝の意を表する。

昭和五十六年四月三日

金田 一 春彦

『明解日本語アクセント辞典』初版の序

全国の日本語の中で、特に東京の言葉だけが正しい言葉で、ほかの地方の言葉はまちがった言葉だという行き方に私は反対である。東京語は決してそのような意図をもって作られた言葉でもないし、それよりも東京生れの人だけが得意げにふるまい、ほかの地方の人の言葉を見くだす態度はおおよそ不愉快である。

しかし一方、日本語の乱れが人人の口のにぼって以来久しい。ラジオやテレビから流れる日本語は、ヨーロッパあたりへ持って行ったら、数か国語が代る代る聞えるようなものである。日本語を学ぶ外国人は、日本語を教えてくれる日本人ごとに、語彙表現が異なり発音が異なることをしきりに訴える。特にアクセントに至っては、関東の人と関西の人では高低を全く逆に発音し、また地方によってはアクセントが全然ないところさえある。代表的な日本語、規格にあった日本語を望む声は内外を通じて高まりつつある。

現代の日本人は、この要望にこたえる日本語を作り上げる責務をもつ。理想的な標準日本語は必ず生れなければならぬ。それは恐らく全国各地の方言から粹を集めた、豊かな、しかも洗練された言語体系であろう。そのような言語の基盤になるものは、やはり現実に日本全国に共通語として通用している、現在の東京語をおいてほかにない。この際、すべての日本人が、日常の生活言語のほかに東京語をも一応自分のものにすることが望まれる。

東京語のアクセントを記載した辞典はすでに世上に何冊か出ている。特にNHK編の“日本語アクセント辞典”は、良心的な編修態度を反映して、標準的なものとして名を得ている。しかし、この種の辞典にあげられた語彙の数は残念ながら少なく、例えば固有名詞の条を欠き、また助詞・助動詞の類や動詞の変化の類にはほとんど触れていない。これらは要するに、東京アクセントに相当通じた人にしてはじめて使いこなせる辞典だった。

本書編纂の意図は、これらの点を考慮し、どんな人でも使用できることをモットーとした。特に東京アクセントになじみの薄い人から一番要望されているのは、一体どういう言葉はどういうアクセントをもつかという、一般法則の呈示である。この辞典で一番力を注いだのはこの

点だと言っている。

なお、個々の語については、アクセントのみならず、ガ行鼻音や、母音の無声化の有無など発音上注意すべき点を注記して、アクセント辞典であると同時に、日本語発音辞典としても役立つよう意を用いた。

ところで、この辞典は私が手をくだして作ったものではない。編修者は、現在早大国文学科の副手である秋永一枝君である。

四・五年前のこと、三省堂編修所では、同社から発行する一般諸辞典のための資料として、東京アクセントを記載した膨大なカードを作っていた。この仕事に直接あたったのは、当時同編修所員であった秋永君であり、この辞典の編修は、そのカードを基礎にしてはじめられたものである。同君はその後世に出ているすべての東京アクセントの文献を渉猟する一方、個々の専門語については、――その道の専門家で、しかも東京生まれ、東京育ちという条件を具えた人の門をたたいて、そのアクセントを確かめるという慎重ぶりだった。

なおそのほかに、寸暇をさいては東京各地および近郊を駆け回ってアクセントを調査して歩き万全を期したというのだから、その骨折りは驚嘆にあたいする。私はただ全体のでき上りを通覧し、巻末の法則のまとめ方について多少の知恵を貸したに過ぎない。これは、私の責任のがれを意味するのではない。ほとんど口出しをする余地がなかったのである。

この辞典が成るに至るまでには多くの方々の御好意と御協力をいただいたが、中でも有益な教示と便宜を与えられたNHK放送文化研究所・国立国語研究所の方方、土岐善麿博士、榎垣実氏、鈴木幸夫氏、貴重な時間を割いて――の語を発音して下さった次の諸氏に厚くお礼申し上げます。

芥川也寸志、安倍季厳、安藤更生、飯島小平、飯島正、池田理英、石川光春、伊藤康安、岩本堅一、緒方規雄、小沼丹、加藤光次郎、加藤誠平、神尾明正、川合幸晴、岸野知雄、倉橋健、後藤真、斉藤直芳、佐口卓、鈴木孝夫、関根吉郎、高木純一、高島春雄、高山英華、滝口宏、辻光之助、坪井誠太郎、戸塚文子、中能島欣一、中村芝鶴、中村吉三郎、中村守純、仁戸田六三郎、野口弥吉、野村保、野村万蔵、林健太郎、檜山義夫、古川晴男、古川晴風、宝生弥一、宮川曼魚、武者金吉、山辺知行、山村宗謙、亘理俊次、渡辺辰之助（敬称略）

今この辞典を世に送り出すに際し、読者各位が当事者の意のあるところを汲んで、この辞典を活用して下さることを望んでやまない。そして、更にこの辞典の不備の点についても卒直な御意見をお寄せ下さり、将来の改訂のために資することができるならば、これに越した喜びはない。

昭和三十三年五月五日

金田一春彦

この辞典を使う人のために

1 総記

この辞典は、日常多く用いられる語を中心として、固有名詞を含む約76,600語を選び、その“標準的な東京アクセント”と合わせて“発音”を示したものである。

アクセントは単語ばかりでなく、助詞・助動詞・接辞・造語成分など、複合する語によってアクセントの定まるものにも記載して、実際の会話の便を計った。

なお、巻末に“アクセント習得に必要な法則”をあげて、標準アクセントをマスターする一助とした。この習得法則の目次を本文だけでなく、巻末見返しにも収めて利用しやすくした。

以下ここで東京というのは東京都及びいわゆる東京式アクセントの地域をさすのではなく、東京旧市内でその語に馴染みのある人のアクセントを東京アクセントとして取り上げてある。

下にこの辞典の項目の例を掲げる。それぞれ当該箇所を参照していただきたい。

←見出し語→	←解説 [習得法則番号]→
ニホンゴ, ニッポンゴ	日本語 →14
ジテン, (古は ジテン)	字典, 辞典, 事典 →8
アクセント	accent →9

2 見出し語について

a. 表記法

(1) 発音の表記法

①見出しの部分に、カタカナアンチック体を用いて発音を表わし、高く発音する部分に **ー** を用いてアクセントを表わした。

②表音式をとった。現代仮名遣いとは必ずしも一致しない。

(イ) 引き音は **ー** で示した。**イ**、**ウ** のうち引き音にも発音するものは小さい★の印をつけて、**イ★**、**ウ★** のように表わした。 —解説24ページ参照—

(ロ) 促音は、小文字の **ッ** で示した。

(ハ) **ジ・ヂ**、**ズ・ヅ** は、**シジミ** (蜆)、**チジミ** (縮)、**スズミ** (涼)、**ツズミ** (鼓) のようにすべて **ジ**、**ズ** で表わした。

③ガ行鼻音は、**ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** のように半濁音符をつけて示した。

—解説23ページ参照—

④母音の無声化は、**フク** (吹く) の**フ**、**アキカゼ** (秋風) の**キ**のように細字によって

示した。

—解説25ページ参照—

⑤ウマ(馬), ウマレル(生れる), シラウメ(白梅), ウモレギ(埋れ木)のような、自然の発音で [m] の音になるものは、ウマ, シマ ウマレル, シマレル シラウメ, シランメ ウモレギ, シンモレギ のように併記した。但し、ウモ(羽毛)のように、ウ の次に意義の切れめがあって [m] の音にならないものはウのまま記した。

⑥はねる音(撥音^{ハネ})は シン で表記したが、シン は後続する音の有無やその違いによって異なる。後続する音がなければ [N] だが、後続する音が唇音であれば [m], 歯音であれば [n], 軟口蓋音であれば [ŋ], 摩擦音や母音であれば鼻母音になるなど具体的な音声はさまざまである。

⑦外来語の発音は原則として一般の慣用に従って表記した。例えば外来語にみられる [kwa] は クワ, [di] は デイ などのように、クワ, シュ, ジュ, チュ, ツェ, ツォ, ティ, ディ, デュ, ファ, フィ, フェ, フォ の表記も用いた。

—解説27ページ参照—

⑧助詞・助動詞・接辞・造語成分などは、複合する単語の部分を …… で代表させ、……ガ, ……ワ, ……テ, ……ラレル, ……ケン(…県)のように表わし、各法則番号のアクセント習得法則を参照させた。但し、複合する語によってアクセントや発音が変わるために見出し語ではアクセントを示しにくいものはひらがな見出しとし、各法則番号のアクセント習得法則を参照させた。

……ワ; ……ワ; ……ワ ……は『助』(トリワ 鳥~, ハナワ 花~, アメワ 雨~) →71

……けん ……軒『数』 →34,35

ご…… 御…『接頭』 →92

(2)アクセントの表記法

—解説16ページ参照—

①高く発音する部分は 〱 で示した。但し、次が低く発音される場合には 〴 を付した。イヌ のように、語の末尾につく 〴 は、その語の後に「が」「は」などの助詞がつく場合に助詞が低く発音されることを示している。

キジ	雉	イヌ	犬	サル	猿	モモタロー	桃太郎
キジガ	雉が	イヌガ	犬が	サルガ	猿が	モモタローガ	桃太郎が
キジワ	雉は	イヌワ	犬は	サルワ	猿は	モモタローワ	桃太郎は

二拍めから上がる語で、第二拍が引き音や撥音、二重母音副音の場合、無造作な発音の折や個人によって第一拍から高くなる。例えば、トーキョー を トーキョー, シンブンシャ を シンブンシャ, カイシャ を カイシャ のように。また、具体的発音では、促音はその前の拍と同じ高さを保とうとする。例えば ゲツキユー を ゲツキユー, ハッキリ を ハッキリ, イッサイ は イッサイ のように、本書ではアクセン

ト体系から考えて、以上の表示はすべて割愛してある。

②連語などアクセントに切れめがある場合には、そこに・を置き、区切りを示した。

アキノ・ナナクサ 秋の七草

ネコモ・シヤクシモ 猫も杓子も

③アクセントの切れめの有無によって、複合語の後部のアクセントが変化する場合があるが、スペースの節約上次のように表わした。

(イ) 次のような場合、複合して切れめがなくなると、間の低い拍が高く平らに変化する。即ち “ ” の部分は切れめがある時は低く、切れめがなくなると高く発音される。

センザイ(・)イチグー	千載一遇	{	センザイ・イチグー
			センザイイチグー
ミナモトノ(・)ヨシツネ	源義経	{	ミナモトノ・ヨシツネ
			ミナモトノヨシツネ

(ロ) 次のような場合、複合して切れめがなくなると、後部の高い拍が、低く平らに変化する。即ち “ ” の部分は切れめがある時は高く、切れめがなくなると低く発音される。

ジガ(・)ジサン	自画自賛	{	ジガ・ジサン
			ジガジサン
ニジュー(・)イチ	二十一	{	ニジュー・イチ
			ニジューイチ

(ハ) 次のような場合は、切れめがある時も複合して切れめがなくなる時も、常にアクセントが変化しない。

ゼンナン(・)ゼンニョ	善男善女	{	ゼンナン・ゼンニョ
			ゼンナンゼンニョ
ヤマダ(・)ハナコ	山田花子	{	ヤマダ・ハナコ
			ヤマダハナコ

b. 配列

(1) 見出しがなの配列

発音式五十音順によるが、同じカナのことばがつづく時は、次の方針によった。

①拍数の少ないもの(ヤ、ユ、ヨ などのつく拗音^{おん}及び外来語における ア、イ、エ、オ などの小文字を含むもの)や、引き音(一)及び促音(ッ)を含むものは、直音の前に置いた。なお、シヤ、シュ、ショ や ファ、フィ、フェ、フォ の類、及び引き音や促音はそれぞれ一拍と数える。

イシャ 医者 イシャ 石屋

②いわゆる清濁は、清音，濁音，半濁音の順に配列した。

ハハ 母 ハバ 幅 ババ 婆, 祖母 パパ papa

③助詞・助動詞・接辞・造語成分など，…… のつくものは，…… のつかないものの後に置いた。

テ 手 ……テ〔助〕

オ 尾, 緒 ……オ …を〔助〕 お…… 御…〔接頭〕

④人名及び活用形に限り，姓及び終止形の見出し内に収めた。

アシカガ 足利〔地・姓〕

～・タカウジ, アシカガタカウジ ～尊氏

サク 咲く サカナイ, サゴ, サキマス, サイテ, サケバ, サケ

アオイ 青い アオカッタ, アオク, アオクテ, (新は アオクテ),

アオケレバ, アオシ

⑤東京都区内で現実に行われていても，標準アクセントとしては望ましくないものや，現実には行われていないが標準アクセントとしては望ましいものに限り，()内にそれぞれ次のような注を付した。

アネ, (アネ は避けたい) 姉

クワ, (クワ は避けたい) 鍬

クモ, (クモ も許容) 雲

オル, (オル も許容) 織る

(2) 発音及びアクセントの配列

①発音及びアクセントの同じ語は，原則として同じ見出しのもとに入れた。但し，……を伴う助詞・助動詞・接辞・造語成分の類は別項をたてた。

②発音が同じで，アクセントの異なるものは，原則として平板式，起伏式の順に配列した。

カキ 柿

カキ 牡蠣

カキ 垣

③同じ語彙で類似の発音をもつものは，慣用及び標準音として望ましいものに重点を置いて配列した。

(イ) それぞれの項をたてて，併記した。

ハイ, ハエ 蠅

ハエ, ハイ 蠅

(ロ) それぞれの項をたて，望ましくない方の見出しにのみ望ましい形を併記した。

サケ 鮭

シャケ, サケ 鮭

アナタ 貴方

アンタ, アナタ 貴方

(ハ) 慣用または、望ましい方の見出しに併記した。

ジッポン, **ジュッポン** 十本 **セピア**, **セビヤ** sepia

(ニ) 誤用または望ましくない発音の場合は、⇒ で正しい発音を参照させた。

シャジ, 《新は **シャジ**》 匙 ⇒ **サジ**

(ホ) 清濁のみ異なるような語の類は、慣用または望ましい方を先にして同一項目に併記した。その場合、望ましくない方を () に入れる場合もある。

ハンドバッグ, (**ハンドバック**) handbag

- ④二通り以上のアクセントや発音があるものは、標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記した。また年代的に新しいアクセントや、伝統的で古めかしいアクセントの層の目立つものに限り、《新は…》, 《古は…》, 《もと…》のように示した。但し、これはあくまでも相対的な異なりで、一定の年代を示すものではない。また、高年層にはふつうに用いられるが、中年層以下には強めの際にのみ用いられるようなものは、《強は…》のように示した。

ス, 《新は **ス**》 巢

スシ, 《新は **スシ**》 鮓

ノゾム, 《新は **ノゾム**》 望む, 臨む

カキコム, 《新は **カキコム**》 書き込む

タカイ 高い …… , **タカクテ**, 《新は **タカクテ**》, ……

オトメ, 《古は **オトメ**》 乙女

アカトンボ, 《古は **アカトンボ**》 赤蜻蛉

カミ, 《もと **カミ**》 神

オモイキル, **オモイギル**, 《古・強は **オモイキル**》 思い切る

ナマヤサシイ, **ナマヤサジイ**, 《古・強は **ナマヤサシイ**》 生易しい

- ⑤使用度の高い動詞・形容詞の単純語にはその活用形(形容詞には文語終止形も)を示した。他の語は習得法則の活用表を参照し、本文中の終止形からそれぞれ類推していただきたい。

3 解説の部分について

a. 表記法

原則として、漢字・平仮名交じりとし、() 内に用例・補助解説を、【 】《 》内に略語・補注などを示した。

(1) 漢字

- ①常用漢字を重視したが、必要により常用漢字以外の漢字も用いた。
 ②常用漢字による書きかえのうち、意味のとりにくいものなどは、もとの字を（ ）に入れて示した。但し、複合語以外は併記した。

日食(蝕) 包(庖)丁 炎,焰 切る,斬る,伐る

- ③あて字は慣用のものに限り使用した。

ステキ 素敵 タバコ 煙草

- (2)現代仮名遣いを用いた。送り仮名は、誤読のおそれのない範囲にとどめた。

(3) 外来語

- ①直接日本語に影響した言語のスペルを入れ、[] 内に国籍を表示するのを原則とした。但し、英語は原則として表示しない。

パン pāo [葡] ガラス glas [蘭]
 ジャム jam クリーム cream

- ②日本語と外来語との複合語は、原則として日本語と原語のスペルをつづけて記し、英語以外は最後に国籍を示した。

マドガラス 窓 glas [蘭] ナマクリーム 生 cream
 クリームイロ cream 色 パンヤ pāo 屋 [葡]

- ③国籍の異なる外来語と外来語との複合した和製語はプラスの印で結び、各のスペルのあとに国籍を示した。但し、同一の国籍のものは〔和〕とし、+ を省略した。

ジャムパン jam [英]+pāo [葡]
 コーヒーポット koffie [蘭]+pot [英]
 ゲームセット game set [和]

b. 配列

同じ見出しが二語以上の語を示す場合は、コンマ「・」或は中黒「・」を用い、以下を考慮して併記することを原則とした。

- (1)和語、漢語、外来語の順

タイ 鯛… 体,対,帯,隊,態… 他意… 泰[国]… tie

- (2)感動詞・副詞の類、動詞、形容詞、一般名詞、数詞、固有名詞、省略語の順

- (3)複合度の強いものから、弱いものへの順

C. アクセント習得法則

それぞれの解説の末尾には、→ のあとに巻末のアクセント習得法則の法則番号が

示してある。これは東京アクセントの法則を 0 から 99 のグループ別に収めたものである。音韻によってアクセントや発音が更に変化するものには、そのあとに **abcd** を付した。単純語はむずかしいが、転成語や複合語のアクセントを覚えるには、それらの法則を習得することが近道である。但し、語源や語構成に諸説あるものなどは法則番号を省略してある。

4 記号一覧

- 見出し語では、二通り以上のアクセント及び発音がある場合に用いた。

カミナリ, **カミナリ** 雷
カナシミ, **カナシミ**, **カナシミ** 悲しみ

解説にあたる部分では、二つ以上の同音語がある場合に用いた。

ジシン 自信, 地震, 磁針

- 見出し語では、アクセントの切れめを示した。

サンジュー・サンカシヨ 三十三箇所

解説にあたる部分では「及び」、「や」、「と」の意味を表わすのに用いた。

アオキ 青木〔植・姓〕
ジョーシンエツ 上信越く上野^{こう}・信濃^{しな}・越後^{えち}

- 助詞・助動詞・接辞・造語成分など、……を伴って表わされる見出し語のうち、前部の語のアクセントや音韻の性格により、複合語のアクセントが変化する場合に用いた。

……**ガ**; ……**ガ**; ……**ガ** …が〔助〕(**トリガ** 鳥~,
ハナガ 花~ **アメガ** 雨~)

- 助詞・助動詞・接辞・造語成分など、……を伴って表わされる見出し語のうち、前部の語の拍数により、複合語のアクセントが変化する場合に用いた。

……**マル**: ……**マル** …丸(**キクマル** 菊~, **ランマル** 蘭~,
ヒヨシマル 日吉~, **ヒカワマル** 氷川~)

- 解説中、連続する語が同格でなく、そこで文が切れるような場合に用いた。

ジゴ 四五(=四か五。年は~)
ユーコ, **ユーコ** 香香(=漬物。オユーコ 御~)

- ★ **イ, ウ** のうち普通の発音では引き音に発音されるものは、**イ_★, ウ_★** のように示した。

テイ_★ネイ_★ 丁寧 **ウレシイ_★** 嬉しい **クウ_★** 食う

- = 説明及び言いかえを示す場合に用いた。

オカガミ 御鏡(=鏡餅) **オッパイ** (=乳)

- ～ アクセントの区切りのある語で、二通り以上のアクセントがある場合、アクセントの変わらない部分の省略に用いた。

アトノ(・)マツリ, **～(・)マツリ** 後の祭

人名が姓の見出しに追ひこまれていて、姓にあたる部分のアクセントが変らない場合、見出し語の部分の省略に用いた。

ダテ 伊達〔姓〕
～(・)マサムネ ～政宗

- ～ 用例中で、見出し語及び見出し語にあてた漢字仮名交じりの部分の省略に用いた。

ハナ 端(=最初。～から) **ハナ** 花(**オハナ** 御～)

- < 省略される以前の形や、外来語で著しく発音の変化した場合などに用いた。

ユークー 高校<高等学校 **デパート** <department store

- + 外来語が複合した和製語であることを示す。

ジャムパン jam [英]+pão [葡]
クレパス, クレパス <crayon+pastel

- ↔ 反対語・対照的な語を表す。

オーテ 大手(↔からめて) **オツ** 乙(↔甲)

- ⇒ 他項を参照させる意を表す。

ウタマロ 歌麿〔人〕⇒**キタガワ**～ (姓名全形を参照させたい)
ウデル 茹でる ⇒**ユデル** (望ましい発音を参照させたい)

- 巻末のアクセント習得法則番号の参照に用いた。

トーキョート 東京都 →14a **チヨダク** 千代田区 →14

解説

1 アクセントについて

現在“アクセント”ということばは、さまざまに使われているが、“日本語のアクセント”という時の標準的な使い方としては、“**個々の語について定まっている高低の配置**”という意味である。

“語”というのは、ほとんど文法でいう単語と同じとみていただいてよい。例えば、「橋」の時は**シ**を高くいう、「箸」の時は**シ**を低くいう、というようなのが日本語のアクセントである。これは既に御承知のことと思う。但しここでちょっと注意してほしいことは、ある語を発音した時の声の上がり下がり、それがそのままアクセントだとはいえないことである。

例えば、同じ「箸」という単語でも、「箸？」というように相手に問いかけの気持でいう時は、**ハシ** といったあとで、**ハシノ** のように語尾を上げて発音する。この場合の語尾の高まりは、アクセントではなくイントネーションとよばれるものである。なぜならば、これは特定の語について決まっているのではなく、“問いかけ”つまり返事がほしいという、一般的な心理によって決まるからである。こういう声の上げ下げは、大体、日本語を通じて全国共通の現象であるから、特に骨を折って覚える必要はない。ところがアクセントは、その“語”について決まっているもので、それも地方によって異なるから、特に東京共通語を使おうとする場合には“学習”が必要である。

人によると、アクセントは単語によって決まっているというが、「箸」と「箸箱」では、「箸」のアクセントが違って変だと思われるかもしれない。しかし、これはそれでよい。なぜなら、「箸箱」は一つの“**複合語**”であって、「箸」とは別の単語だからである。複合語は、アクセントの法則に従って変化をする。つまり、基本的な語と複合の型とを覚えれば、どうにか使いこなせるものである。そこで、この辞典では、巻末に**アクセント習得法則**をもうけ、本文の単語から参照できるようにした。

助詞や接尾辞などもやはり単語だが、それだけを切り離して発音することがない。そこで、この辞典では、名詞や動詞などについた時のアクセントの型を示してある。

もう一度くり返せば、日本語のアクセントは、“**語による高低の配置のきまり**”である。ここで高低の配置といっても、その高い部分と低い部分との開きが、音楽で4度だとか5度だとかいうような、そんなやかましいものではない。ただ上がっているか、下がっているか程度のごく大まかなものである。つまり、すべての語は、低い部分と高い部分に分けられる。従って、“**アクセントの型**”というのもごく少数しかなく、東京アクセントでは一拍語ないし六拍語は、18, 19ページの第1表の型のどれかに含ま

れてしまう。この表は、型の一覧表であると同時に、この辞典における標準アクセントの発音法をも簡単に示している。例えば、第1表の「鳥が」はトが低く、リが高く、助詞「が」などがつければ、**トリガ**のようにそれも高く発音することを表わす。「花が」はハを低く、ナを高く、助詞「が」などがつければ、**ハナガ**のように次の拍を低く下げて発音する。つまり、この辞典で線のある部分を高く、ない部分を低く発音すれば、とにかく東京式アクセントで話すことができる。「　」の部分は「　」と同じく高い部分だが、次が低いことを表わす。

ここに拍というのは、大体カナ一字で書かれる音をさす。例えば「鳥」は二拍、「桜」は三拍と数える。引き音(一)、撥音はふ(ン)、促音(ッ)も一拍に数える。拗音ようは例外で、**キャ**、**キュ**、**キョ**などはそれぞれ一文字分の長さで発音されるので、カナ二字で一拍と数える、従って、「天」は二拍、「両親」は四拍となる。

以上のように、日本語のアクセントは、高低の変化である。これに対して、日本語のアクセントを強弱変化だと主張する人があるが、これは違う。英語やドイツ語などでは、一つ一つの単語について、どの単語は、どこを強めて発音するか、ということが決まっている。「命令」という意味の名詞‘dictate’は**ディ**のあたりを強く発音し、「書きとらせる」「命令する」という意味の動詞は、**テ**のあたりを強く発音する。これは、その時の話し手の気持にはかかわらない。これが英語のアクセントである。これに対して日本語では、日常の発音で、ある部分を強くいうことはあるが、それは感情をこめていうような場合である。つまり、その時の臨時的な傾向で、各の単語について強めのきまりがあるわけではない。英語では強めが単語に備わっているのに対し、日本語で単語に決まっているのは高低である。その関係は全く平行的である。だから、英語の単語における強めのきまりをアクセントと呼び、日本語では高低のきまりをアクセントと呼ぶ。英語のは“**強弱アクセント**”であり、日本語のは“**高低アクセント**”である。

この日本語のアクセントについてまず注意しなければならないことは、地方によって違いが激しいということである。標準アクセントの問題がやかましいのも原因はそこにある。

第2表(20ページ)の「**各地アクセント一覧表**」を御覧いただきたい。表中で「**類別**」というのは、平安末の京都アクセントと現代諸方言アクセントから、古くは同じアクセント型だったと思われる語彙をまとめたものだが、ここに示すように、日本語のアクセントは複雑極まりない。例えば第三類の「花」というアクセントは、東京・名古屋・広島などではハを低く、京都・大阪・高知などではハを高く発音する。反対に第五類の「秋」というアクセントは、東京・名古屋・広島などではアを高く、京都・大阪・高知などではアを低く発音する。このほか、見返しの地図に示すように、仙台・水戸・宮崎などでは、語によるアクセントの区別をもたない。全国どこへ行っても、

名 詞 の 型

第1表

型の種類 拍数		一拍の語	二拍の語	三拍の語
起 伏 式	平板型	 ヒ (ガ) 日 (が)	 トリ (ガ) 鳥 (が)	 サクラ (ガ) 桜 (が)
	尾高型		 ハナ (ガ) 花 (が)	 オトコ (ガ) 男 (が)
	中高型			 ココロ (ガ) 心 (が)
	頭高型	 ヒ (ガ) 火 (が)	 アメ (ガ) 雨 (が)	 イノチ (ガ) 命 (が)

一 覧 表

四拍の語	五拍の語	六拍の語
 トモダチ (ガ) 友 達 (が)	 トナリムラ (ガ) 隣 村 (が)	 ムラサキイロ (ガ) 紫 色 (が)
 イモート (ガ) 妹 (が)	 オショウガツ (ガ) お 正 月 (が)	 ジュイチガツ (ガ) 十 一 月 (が)
 ミズウミ (ガ) 湖 (が)	 ワタシブネ (ガ) 渡 し 船 (が)	 アイアイガサ (ガ) 相 合 傘 (が)
 ウグイス (ガ) 鶯 (が)	 ナツヤスミ (ガ) 夏 休 み (が)	 コドモゴコロ (ガ) 子 供 心 (が)
	 オナイドシ (ガ) 同 い 年 (が)	 シンカンセン (ガ) 新 幹 線 (が)
		 オマワリサン (ガ) お 巡 り さん (が)
 フジサン (ガ) 富 士 山 (が)	 アクセント (ガ) accent (が)	 トーカイドー (ガ) 東 海 道 (が)

注 ●は名詞の一拍を，▽は助詞の一拍を表わす。

第2表

各地アクセント一覧表 (二拍名詞+ガ・ワ)

類別 地方名	第一類		第二類		第三類		第四類		第五類	
	庭・竹	水・鳥	歌・音	夏・石	犬・髪	花・色	笠・船	松・箸	春・秋	雨・窓
高知							○● ○●▽		○● ○●▽	
徳島	●●			●○					○●~○● ○●▽	○●
大阪	●●▽			●○▽			○● ○○▽		○● ○●▽	○●▽~
京都									○● ○●▽	○●▽
秋田		○○ ○○▽				○● ○●▽			○● ○●▽	○●▽
函館		○● ○○▽							○● ○●▽	○●▽
富山			○● ○○▽	●○ ●○▽			○● ○●▽			○● ○●▽
高田			○● ○○▽・○●▽							
松本	○● ○●▽									
東京				○●				●○		
名古屋				○●▽				●○▽		
広島	○●(○○) ○●▽・(○○▽)									
福岡										
長崎	●○						○●			
鹿児島	○●▽						○○▽			

注 ○, ▽は低い拍を表す。} ▽, ▼は助詞 ガ, ワを表わす。
 ●, ▼は高い拍を表す。}

●は一拍が長くなり、降り拍^{（降リ）}であることを示す。

類別の代表語「庭・竹、歌・音、花・色、笠・船、雨・窓」は広い母音(a, e, o)で終る語を、「水・鳥、夏・石、犬・髪、松・箸、春・秋」は狭い母音(i, u)で終る語を示す。

「~」は同じ類、同じ語でも話者によってゆれることを、「・」は同じ類でも語によって異なることを、()内は研究者によって認定の異なることを示す。

地名はそれぞれ市(旧市)の中心部のアクセントを示す。なお「高田」は現上越市。

アクセントが変わらないというような語は全くない状態である。但し、この中にも一定の類型があって、大きく次の四つのグループに分けることができる。この四つの区別については、あとになってまた述べる。読者の中で、自分のアクセントがどのグループに属するか迷われる方は、前見返しの「**アクセント分布図**」を参照していただきたい。

- | | |
|----------------------------|--|
| (1) 東京式アクセント | { 秋, 雨, 箸, 笠……初めを高く発音する
髪, 花, 石, 音……初めを低く発音する |
| (2) 京阪式アクセント | { 髪, 花, 石, 音……初めを高く発音する
秋, 雨, 箸, 笠……初めを低く発音する |
| (3) N ^{はい} 型アクセント | { アクセントの型の種類が一定のもの |
| (4) 無型アクセント | { 語ごとのアクセントが定まらない |

アクセント分布図のうち、(3)にあたるのは、九州・沖縄地方や隠岐の 5, 6 及び 8' の地域などで、(4)にあたるのは 8 の地域である。

以上のような日本語のアクセントは、一体どういう役目を果たすのだろうか。第一に、日本語には同音異義語が実に多い。漢語となるとなおさらである。その場合、語によってアクセントが異なれば、語の“意義の違い”を区分するのに便利である。

例えば、「火にあたるより日にあたれ」は東京式では ヒニアタルヨリ・ヒニ^レアタレ という。この「火」と「日」が同じアクセントであつたら、どちらにあたるのをすすめているのか分からなくなってしまう。「亀と瓶^{びん}」、「箸^しと橋」、「鶴^{つる}と弦」、「牡蠣^{かき}と柿」なども、前後の関連がなくとも、アクセントで聞きわけることができる。

京阪式方言でも、具体的高低の姿こそ違え、一つ一つを高低変化で区別する点では同じである。例えば「火にあたるより……」は ヒニアタルヨリ・ヒ^レニ^レアタレ と区別して発音する。

アクセントは、以上のほかに、“語と語の切れめを示す”という働きをもつ。東京式アクセントでは、原則として“高く発音される部分は、一語のうち一箇所にかたまっている。つづけて二拍以上が高くなることはあるが、一語のうちで高く発音される拍が、離れた場所にあることはない”。このことは、“この語が一語であつて二語ではない”ことを表わしている。

東京式アクセントにはまた、“語の第一拍と第二拍とは高さが異なる”という性質がある。すなわち、“第一拍が高ければ、第二拍が低く、第一拍が低ければ第二拍は高い”。このことは“**ここが語の始まりだ**”ということを示している。これらは、次のような文例にあうとき、一層判然とするであろう。

- | | |
|-------------|----------------------|
| { 二羽鶏がいる | <u>ニワ・ニワトリガイル</u> |
| { 庭には鳥がいる | <u>ニワニワ・トリガイル</u> |
| { 庭には鶏がいる | <u>ニワニワ・ニワトリガイル</u> |
| { 庭には二羽鳥がいる | <u>ニワニワ・ニワ・トリガイル</u> |
| { 二羽庭には鳥がいる | <u>ニワ・ニワニワ・トリガイル</u> |

{	庭には二羽鶏がいる	ニワニワ・ニワ・ニワトリガイル
	二羽庭には鶏がいる	ニワ・ニワニワ・ニワトリガイル

ところで、現在日本語のアクセントの中で、東京のアクセントが“標準アクセント”とみなされてきている。

これについては、地方の人からいろいろ反対意見が出された。全国のアクセントはまちまちで統一できるものではないとか、伝統的なことばをもつ京阪式アクセントが望ましいとか……。しかし、東京式アクセントには、標準アクセントとして待遇していい長所がある。見返しの地図をみられたい、東京に似たアクセントの地方は、関東の中央部から中部地方の大部分、中国地方の全体と九州の入口あたりまで及び、およそ日本の半分以上の地方に東京風のアクセントが広まっている。もちろん、地方によって少しずつ違いがある。しかし、日本人の総人口の半数以上は、ちょっとした心づかいをすれば、東京アクセントを話せるようになる。それにくらべると、京阪式のアクセントは誇るべき伝統をもっているが、分布範囲が狭く、使用者の数も少ない。

その他、東京が日本最大の文化の中心であり、東京語というものがいわゆる標準語とされていることや、前述のようにアクセントの機能をよく発揮していること、及びアクセントの法則が比較的はっきりしていて、覚えやすいことなどからも、東京式アクセントは標準アクセントとしてふさわしい。

これは京阪式アクセントを使用される人には、不本意なことかもしれない。しかし、京阪式アクセントとは対照的にできているから、自分たちのもっているアクセントと東京式のアクセントとの間にみられる“対応の法則”を知ることによって、東京アクセントを比較的楽にマスターすることができよう。これについては、巻末の“アクセント習得法則”を利用していただきたい。

他方、仙台・水戸などのアクセントの型の区別のない地方の人たちは、基礎になるアクセント感をもたれないために、東京アクセントの習得は少なからず困難であるが、全体のことばの調子を改め、「橋と箸」「着ると切る」など、同音異義語に注意すれば、徐徐に効果をあげることができよう。

この辞典では、見出し語のすべてに現在東京で広く行われているアクセントを注記した。現在、東京で幾通りものアクセントが行われている場合は、なるべく現状に即して載せるようにしたが、スペースの関係上、省略した場合も多い。これらアクセントの選定に当っては、その語に馴染みのある人のアクセントを重用した。

また、比較的高年層でのみ多く使われている古く伝統的なアクセント、若い層でこのごろ盛んに使われだした新しいアクセントは、特に注記して参考に供した。これから東京アクセントを覚えようとする方は、《古は…》、《もと…》、《新は…》、《強は…》という注記のないものに、まず注意していただきたい。

なお、地方の固有名詞などには、各地のアクセントもあわせて注記したかったが、

スペースの都合上割愛せざるを得なかった。また、「雲と蜘蛛」,「織ると折る」のような東京式アクセントでは区別できず,方言に区別がみられるようなものについては,見出し語のいちいちにその旨を注記した。

2 ガ行鼻音 (ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ) について

語中語尾のガ行音は地方によりさまざまで,あるいは鼻にかからない **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** [g] で,あるいは,鼻にかかる **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** [ŋ] で,あるいは, [g] の前に軽い鼻音が入る **ンガ・ンギ・ング・ンゲ・ンゴ** [ŋg] で発音される。

東京・大阪などは混乱地帯で,中年層・若年層では **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** に発音する傾向が盛んになりつつあるが,いわゆる東京共通語では次のような法則のもとに,鼻音の **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** を使うことになっている。

I 語頭のガ行音は鼻音化しない。但し,助詞「が」「ぐらい」,助動詞「ごとし」などは鼻音化する。

ガイコク (外国) **ギン**コウ (銀行) **グア**イ (具合)
ゲタ (下駄) **ゴ**ム (gom) **ハル**ガ (春が)

II (1) 語中・語尾のガ行音は鼻音化するのを原則とする。

ハルガスミ (春霞) **ヤナ**ギ (柳) **ウグ**イス (鶯)
ツゲル (告げる) **ヒル**ゴロ (昼頃)

(2) 但し, 次のような場合は鼻音化しない。

① 擬声・擬態語その他同音のくり返し

ガンガン **ギラ**ギラ **グズ**グズ **ゲラ**ゲラ **ゴロ**ゴロ
ゴー**ゴ**ー, **ゴ**ー**ゴ**ー (轟轟, 囂囂)

② 数詞の五

ジュー**ゴ** (十五) **ゴ**ヒャク**ゴ**ジュー (五百五十)

但し, 数詞としての意義が薄れた熟語は鼻音化する。

シチゴ**チ**ョー (七五調) **シ**ゴ**ニ**ジュー (四五二十)
ジュー**ゴ**ヤ (十五夜) **キ**ク**ゴ**ロー (菊五郎)

③ 軽い接頭辞の次にくる場合

オギョー**ギ** (御行儀) **オ**ゲン**キ** (御元氣)

但し, 敬語以外のものは両様の発音がみられることが多い。

CD付き「アクセント習得法則」

この小冊子は、従来の本冊の末尾につけられている「アクセント習得法則」から代表例を抜き出して示したものである。単語を単独で示すことは不自然でもあり、ここでは紙面65ページ以内、CD二枚という制約の中で、なるべくセンテンスにして示すように心がけた。発音及びアクセントの表記については本冊の「この辞典を使う人のために」(7ページ～)をご覧ください。

よく電話でご質問のある“→”のあとの0～99の番号は何かということだが、これは巻末の「アクセント習得法則番号」を示している。これで日本語すべての法則を示せるわけではないが、大まかなところはお分かり頂けると思う。

この辞典で示した発音及びアクセントは、東京の標準語といわれているもので、幾通りものアクセントが行われている場合は、二通り、三通りのアクセントを示してある。古いアクセント《古は…》や、新しいアクセント《新は…》が分명한場合はそれも示した。ただし、地方の固有名詞などのアクセントはいちいち示さない方針をとった。例えば、東京では「前橋」はマエバシというが、地元ではマエバシであるなど。

また、表中の語をすべて読むわけにはいかないので、読み上げる語の前に*を付けた。例えば小冊子46ページ表5の「名詞＋助詞」では、*ウシ(牛)、*ウシガ、*サクラ(桜)、*サクラガのように。

また、東京語には「音韻とアクセントとの関係の法則」がある。本冊の(6)ページ以降をご覧ください。特に「母音の無声化する拍とアクセントとの関係の法則」は無声化しない方には聞きとりにくいと思う。その他「ガ行鼻音」もカ行の片仮名に“°”を付したが、既に若年層では衰退しつつある。本冊の解説(23ページ)を参照して頂きたい。

なお、この小冊子の習得番号の見出しには(001-1)と、CDのトラック番号が示してある。小冊子の例と合わせCDを聞いて頂ければ幸である。

音韻とアクセントとの関係の法則

a 特殊な拍とアクセントとの関係 (CD1-2)

引き音(一), 撥音(ン), 促音(ッ)のような拍はアクセントの頂点がおきにくい。そのため、アクセントの高さの切れめがそこにくると、その位置が原則として前にずれる。

(1)引き音

- (ニチヨービ →)ニチヨービニ ガエル (日曜日)
 (ドーソーカイ→)ドーソーカイニ デル (同窓会)
 (コーツーヒ →)コーツーヒオモラウ (交通費)
 (ゴジューダイ→)
 ゴジューダイニ ナッタ (五十代)
 (ゲッキュートリ →)
 ゲッキュートリニ ナル (月給取り)
 (トーキョート→)トーキョートノウマレ (東京都)
 (ニジューマル→)ニジューマルオモラウ (二重丸)

(2)撥音

- (シンブンシャ →)シンブンシャノヒト (新聞社)
 (セイレンダン →)
 セイレンダンニ バイル (青年団)
 (イチパンノリ →)イチパンノリダ (一番乗り)
 (サンネンセイ →)サンネンセイガイル (三年生)
 (コキンシュ →)コキンシュオ ヨム (古今集)

(3)促音

- (ジューイッサイ→)
 ジューイッサイニ ナッタ (十一歳)
 (シカッケイ →)シカッケイダ (四角形)

b 二重母音の拍とアクセントとの関係 (CD1-3)

- (ナライ →)ナライ, セイレナル(習い)

- (ニオイ →)ニオイガスル(匂い)
 (カンガエ →)カンガエガアル(考え)
 (ネッタイギョ→)ネッタイギョオ カウ (熱帯魚)
 (サンバイズ →)サンバイズオ ヅガル (三杯酢)
 (ショタイヌシ→)ショタイヌシト ナル (所帯主)
 (マツヨイグサ→)マツヨイグサガサク (待宵草)
 (タンスイギョ→)タンスイギョガ オヨグ (淡水魚)

c 母音の無声化する拍とアクセントとの関係 (CD1-4)

- (チチ →)チチガイル(父)
 (キテ →)キテクダサイ(来て)
 (ギシャ →)ギシャニノル(汽車)
 (ジケン →)ジケンニ ウガル(試験)
 (フサコ →)フサコサン(房子)
 ビクビク →ビクビクスル

d 音変化並びに拍数変化とアクセントとの関係 (CD1-5)

I 音変化

拍の数は変わらないが、音の変わるもの。

- サジ を →シャジ(魁)
 シンジュク を →シンジク(新宿)
 アタタガイ を →アッタガイ(暖かい)
 ジゴニチ を →ジゴンチ(四五日)
 オマエ を →オメー(お前)
 ワタシワ を →ワタシャー(私は)
 シラナイ を →シラネー(知らない)
 ヤリナザイ を →ヤンナザイ (遣りなさい)
 オカエリナザイ を →オカエンナザイ (お帰るなさい)
 ベッド を →ベツト (bed)
 ハンドバッグ を →ハンドバツク (handbag)

II 拍数変化

(1)音は変わらず、ちがう拍の加わるもの。

セ を →セー (背)

トビ を →トンビ (薦)

アマリ を →アンマリ (余り)

イシコロ を →イシッコロ (石塊)

シャバケ を →シャバッケ (娑婆気)

トガル を →トンガル (尖る)

(2)音はほとんど変わらないが、拍の数の減るもの。

ニンギョー を →ニンギョ (人形)

ダイコン を →ダイコ (大根)

ニョーボー を →ニョーボ (女房)

ダイジョーブ を →ダイジョブ (大丈夫)

ワタシャー を →ワタシャ (私は)

オショースァン を →オショサン (和尚さん)

III 音及び拍数変化

コンニチワ を →コンチワ (今日は)

キミノウチ を →キミンチ (君の家)

ヤッテオク を →ヤットク (遣っておく)

モチアゲル を →モチヤゲル
(持ち上げる)シンデシマウ を →シンジマウ,
シンジャウ (死んでしまう)

ファン を →フアン (fan)

注意 1 具体的な発音

(CD1-6)

二拍めから上がる語で、第二拍が引き音や撥音、二重母音副音の場合、無造作な発音の折や個人によって第一拍から高くなることがある。

トーキョー →トーキョー (東京)

シンブンシャ →シンブンシャ (新聞社)

カイシャ →カイシャ (会社)

具体的発音では、促音はその前の拍と同じ高さを保とうとする。

ゲッキュー →ゲッキュー (月給)

ハッキリ →ハッキリ

イッサイ →イッサイ

注意 2 具体的な発音 連濁

(CD1-7)

複合の度合が比較的弱いものは連濁しない。

クザキモネムル (草木)

ウエシタニ ナル (上下)

ミキキオスル (見聞き)

タカヒクガ アル (高低)

トリカエル (取り替える)

フリカエル (振り返る)

ニジューシチニ ナル (二十七)

ヒトツキガ ダツ (一月)

コロコロ ザラサラ ドントン